

## 2014年度プロジェクト科目関連事業開催報告

本学のPBL型授業である「プロジェクト科目」は、講義スタイルとは異なり、テーマについて履修生自身が構想、計画し、議論を重ね、行動する実践型の授業です。全学共通教養教育科目であり、履修生たちは学部・学年の垣根を越えたチームとして、プロジェクトを進行していきます。科目担当者(テーマ提案者)と科目代表者(本学専任教員)が指導を行います。また、教員と学生の間という俯瞰的な立場で授業を補佐する役割として、各プロジェクトに1名、SA(Student Assistant)もしくはTA(Teaching Assistant)を設置しています。各学期末には、成果報告会で活動のアウトプットを行い、その準備時期に合わせて開催されるプロジェクト・リテラシー講習会では、それらに必要な技術を学びます。

- ◆2015年1月8日(木) 秋学期学生懇談会
- ◆2015年3月7日(土) 秋学期科目担当者・代表者懇談会

各プロジェクトの履修生代表が一同に会し、秋学期の全体活動スケジュールについて情報共有が行われました。春・秋連続科目については、春学期の活動の反省点を踏まえて課題を再設定し企画を実施するなど、活動の充実が語られました。秋学期科目については、半期で課題設定から検証までを行うという時間的制約がある中で、成果を導きだそうと奮闘している姿が印象的でした。



- ◆2015年1月15日(木) 秋学期SA/TA協議会

今年度の各プロジェクト活動を客観的な立場で点数化し、それらを基に意見交換を行いました。履修生たちの様々な困難に直面しつつもモチベーションを高く保ち、局面を打開しようとする意欲は評価できる反面、メンバー同士の関係性を重視した結果、無難な課題設定になりがちであったなど、冷静な分析が相次ぎました。それらの問題点について、SA/TAとしていつ、どのような助言を行うかについて議論が交わされました。



- ◆2014年12月9日(火) プロジェクト・リテラシー講習会

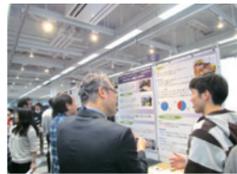
今年度第2回目となる本講習会は、第1回目と同様に、パワープレイズ株式会社濱村道治氏を講師に迎え、「表現する技術について～ポスターセッション」と題して開催しました。ポスターセッション形式で行われたプロジェクト科目の春学期成果報告会では、ポスターを通して活動目的や活動概要が伝えきれなかったという反省点を踏まえて、第三者を意識したポスターづくりをテーマに構成されました。講習会の序段では、春学期成果報告会で用いたポスターについて、全体的な傾向と改善すべきポイントが示されました。また、履修生が作成したポスターをプロの手によってリメイクすることで、レイアウトや文字フォントなど具体的な改善点も示されました。履修生はチームに分かれて、それらの学びのもとに、同一素材を使った観光資源PRのポスターを作成しました。同じテーマであっても視点の違いで全く印象が違うものができあがるということを実感した様子でした。



- ◆2015年1月18日(日) 秋学期成果報告会

今出川校地良心館ラーニング・コモンズにて、春学期・秋学期連続科目13クラス、秋学期科目1クラスの履修生が、活動の成果などをまとめたポスターをもとに最終報告を行いました。当日は、京都のみならず他府県からも大学関係者、学生、一般の方など200人を超える参加があり、開講クラスごとのブースでは、履修生との活発なディスカッションが繰り広げられていました。ポスターセッション終了後の表彰式では、学内外の審査員から講評・総評がありました。評価される点として、春学期の成果報告会と比較してポスター自体の完成度が高まったことや、課題を深く掘り下げて、成果を客観的に分析しようと取り組む姿勢が挙げられました。またその一方で、課題探求に時間を要したために、企画の実施だけにとどまり、分析結果を検証するところまでに及ばなかったことなどが反省点として指摘されました。最後に、最優秀賞、優秀賞および特別賞(CNS賞)を受賞したプロジェクトが表彰されました。

- 最優秀賞:「音楽は心の薬」高齢者に音楽環境を整えるラジオを活用して  
(今出川校地開講、春・秋連続科目)
- 優秀賞:京都の伝統織物をつなぐ～織物文化ビジネスプロジェクト～  
(今出川校地開講、春・秋連続科目)
- 特別賞:京都伏見大学プロジェクト(CNS賞)～「学び」で観光の質向上を～  
(今出川校地開講、春・秋連続科目)



※CNS(Community Networking Service)=SNSをベースに開発された、プロジェクト科目の活動を円滑に支援するための学修支援システム。

【問合せ先】  
同志社大学PBL推進支援センター  
〒602-8580  
京都市上京区今出川通烏丸東入 今出川校地教務課内  
Tel: 075-251-4630 Fax: 075-251-3064  
E-mail: ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

【ホームページ】  
PBL推進支援センター <http://ppsc.doshisha.ac.jp/>  
プロジェクト科目 <http://pbs.doshisha.ac.jp/>  
同志社大学 <http://www.doshisha.ac.jp/>

2014年度プロジェクト科目秋学期成果報告会の様子



昨今、アクティブ・ラーニング(Active Learning)への期待の高まりとともに、各高等教育機関では多様なアクティブ・ラーニングが導入されています。学習者の能動的な参加を促すこれらの授業形態において、質を高めるための学習支援は必要不可欠ですが、その学習支援者についての議論は充分とはいえないのが現状です。同志社大学PBL推進支援センターでは、TA/SA/LA(Teaching Assistant/Student Assistant/Learning Assistant)/チューターという立場で授業に関わる学生を学習支援者と位置づけた時に、その役割とは何か、また、さらなる可能性として何が求められているのか、教員・職員・学生などアクティブ・ラーニングに係る全ての関係者の視点からさぐっていきます。

## PBLと学習支援 —学習支援者としての学生の役割と可能性—

同志社大学PBL推進支援センター長  
文学部教授 山田和人

われわれは、PBLを高次のアクティブ・ラーニングとして位置づけている。それは課題設定を学習者自身が行い、自律的に課題探究を行うからである。課題解決型のPBLの学びにおいては、授業のコントロールは教員が行い、学びのコントロールは学生が行う。職員はプロジェクトに必要な教育リソースの提供を行う。これが、PBLにおける学習支援の役割分担である。さらにTA・SA・LA・チューターなどさまざまな呼称はあるものの、学習支援者として学生が関わる場合がある。授業経験者が担当するケースが多い。ひろくアクティブ・ラーニングでは、学習支援者としての学生の果たす役割は大きい。

アクティブな学びでは、学習プロセスに応じた現在進行形の支援体制を整えることが重要である。というのも、PBLの学習プロセスでは、着想・発想から問題発見、問題発見から課題設定、課題設定から課題解決、課題解決から省察・評価へという一連のステージが想定される。アイデアを議論と対話を通して練り上げ、企画書に仕上げ、役割分担を行い、最終的な行動計画を策定して、成果へとつなげていく。そのためにそれぞれの段階に応じた学習支援が求められるからである。そこに学習支援者としての学生が果たす役割がある。

その間、メンバーは、現場と大学の往還運動を繰り返しながら、そこで課題が適切であるかどうかを常に検証しながら、課題に修正を加え、課題の最適化をはかり、その精度をあげていく。そこから課題解決の方法を探究し、その成果を発表していくことになる。それはまさに現在進

行形の学びといえる。

このプロセスで最も重要なのは、問題発見から課題設定へとという段階である。現場で発見した問題の背景を探り、そこに潜在する課題をチームで取り組むべき課題として適切に設定できるかにプロジェクトの成否はかかっている。往還的な学習は、現場と教室だけにとどまらない。国内外で展開されている類似した課題に取り組んだ先行事例や進行中の事例を視野に入れて、自らの課題と他者の課題を往還する。学習支援者は、適宜そうした事例を紹介したり、課題解決に参考になる図書や文献、人材を提示したり、問題を課題化するための方法や問題の立て方について助言をする。プロジェクトに対する身近な理解者として、相対する姿勢が重要である。別の言い方をすれば、学習支援者としての学生という考え方は、ピアアドバイザーという範囲にとどまらず、授業活動を支援する立場で何ができるかを主体的に考える学生という視点となって現れる。その意味で、授業経験者として後輩に寄り添い、助言を行うというだけでなく、むしろ、教員と学生、授業協力者と学生、学生と職員をつないでいく役割を担っている。もちろん、授業全体をコントロールするのは担当教員の役割であるが、教員・職員・協力者の代弁者ではなく、学生の学びのクオリティを引き上げるためにチームの関係性を強化する立場に立つ。その意味で、学習支援者という立場が、学生の総合的な評価力を育成する場を生み出しているという点に注目すべきであろう。

VOL. 11

# 特集【プロジェクト科目における学習支援者としての学生の役割】

同志社大学全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」における、学習支援者としての学生の役割について紹介します。

## プロジェクト科目 SA/TA制度について



同志社大学プロジェクト科目  
検討部会長  
文学部教授 伊達 立晶

プロジェクト科目ではSA (Student Assistant) やTA (Teaching Assistant) を各プロジェクトに付け、それぞれの活動を補佐してもらっている。(多くは学外からお招きする) 科目担当者や(本学の教員である)科目代表者とともに、SA/TAはプロジェクト科目の教育に携わる学習支援者として活動を支えているのである。

他の授業とも共通するSA/TAの一般的な業務としては、教材のコピーや配布、授業に使用する機材の準備や片付けなど、教員の授業運営のサポートが挙げられよう。履修生の出席管理もまたSA/TAの一般的な業務であるが、主体的な活動が不可欠な科目なので、単なる出席確認だけではなく、欠席者に出席を促すことまで業務に含まれる。

だが何より大切な業務は、履修生の活動に助言を与えること

である。この場合、SA/TA自身は履修者ではないので、安易に答えやアイデアを提供するのではなく、履修生自身が深く考えるように導いてやらなければならない。また科目担当者が今の学生の実態や考え方についてあまり理解していない場合や、履修生に負担がかかりすぎるような場合は、履修生のために科目担当者に助言することもあるだろう。特にプロジェクト科目の性格がまだわかっていない初年度の科目担当者には、過去に履修経験のあるSA/TAの助言はとても参考になるはずである。

このSA/TA制度を充実させるため、プロジェクト科目では開講前にSA/TA説明会を開催し、この科目におけるSA/TA業務を説明している。提出書類や授業運営費からの支出など事務的なことももちろん説明するが、この説明会には以後の各プロジェクト間の相互交流を促進する意味合いもある。そして年に2回(次年度からはより多く)SA/TA協議会を開催し、各プロジェクトの進捗状況や問題、業務上の悩みや迷いなどの情報を共有し、問題の解決に力を貸しあう機会を設けている。こうした協議会や日頃のやり取りの中で、各プロジェクト活動の進捗状況を、プロジェクト科目検討部会事務局(職員)に伝えてもらうこともまた、SA/TAの重要な仕事である。そして各授業の終了時には、SA/TAの視点で報告書を書いてもらい、学期末には、学生成果報告書にも一言寄せてもらっている。

このように、SA/TAの活動は多岐に渡る。SA/TAは円滑なプロジェクト活動のために、なくてはならぬ存在なのである。

## プロジェクト科目 SAを経験して



同志社大学2013年度  
プロジェクト科目  
「京都市伏見地域活性化  
プロジェクト～『学び』で  
観光の質向上を～」SA  
政策学部 政策学科4年  
木村 貴幸 さん

好きな小説や漫画を読んでいると、「あれ、なんか前と雰囲気が変わった?」と思う時がある。どうも登場人物の性格が違う、ストーリーに違和感がある。そう思って調べてみると、どうやら原作者が変わっていたらしい…なんてことがままある。この変化が良い方向にも悪い方向にも転ぶのだから、同じタイトルを引き継ぎ、別の人物がストーリーをつなげていくということは難しい。このプロジェクト科目でも、同じプロジェクト名で複数年にわたって取り組まれているクラスが存在している。初年度のクラスは、担当の講師も学生も完全な手探りであるという意味で難しい。しかし、複数年のクラスもまた違った難しさがある。それは、期末に行われる成果報告会において、「プロジェクトとしての出来不出来」だけではなく「前年度と

の比較」という長めのモノサシを当てられることである。いわば、プロジェクトのメンバーは「話題の新連載!」を書いているつもりでも、審査員は「リレー小説の一部」と考えているようなもので、「内容に既視感がある…」「以前との関連性が見られない…」といったようなコメントが出て、学生が後悔する結果になることもある。こうした認識のズレを指摘し、修正を促すのが編集者の仕事であり、プロジェクト科目で言うSAやTAの役割にあたるだろう。これはとても重要な役割である。しかし、自身のSA経験を振り返ってみると、この取り組みが足りていなかったように思う。「スムーズな議論の進め方」のような話よりも、前年度の活動の反省や審査員のコメント、自分たち以外の他のプロジェクトの取り組み、「プロジェクト科目」の意味の変化…等等、メンバーが目を向けるべきところは他にもあったのに、自分がSAとして満足に誘導できていなかった。いわば、前年度以前の「学び」を今一つ活用できなかった点があったと思う。プロジェクト科目は一般的な座学の授業とは異なるが、学問である以上、「学び」を蓄積して次年度へ移転する必要があると思う。そして、現場でその役割を具体的に担えるのは、自身も活動を経験したSAとTAしかいない。プロジェクト科目の質の向上はSAとTAの動き次第であると言えるだろう。こうしたSAの経験は、自分にとって「学びとは何か」を真剣に考えるキッカケになったと思うし、プロジェクト科目のおかげで自分の大学生活が随分と厚みを増した。良い勉強をさせていただいたと思う。ありがとうございました。

## 卒業生(SA経験者)からのメッセージ



西川 久美子 さん

### 【プロフィール】

2011年度プロジェクト科目「京都の織物文化活性化計画!～織物の伝統技術について考えよう～」履修生。2012年度プロジェクト科目「音楽は心の薬」～高齢者に音楽環境を整えるラジオを活用して」SA。2013年3月、社会学部教育文化学科卒業。現在、中学校で特別支援教育支援員として働いている。

「子どもが安心して伸び伸びと育つことのできる地域のネットワークをつくりたい。」これは、私がずっと抱きつづけてきた思いです。しかし、どのような職業に就けばいいのかかわからず、悶々と学生時代をすごしていました。そんな中、プロジェクト科目と出会い、その思いがより具体的になりました。

三年次に受講した「京都の織物文化活性化計画!～織物の伝統技術について考えよう～」では、職人の方々や京都市営地下鉄の方々や協力し、錦の伝統織物について情報発信をおこないました。職人の工房を何度も訪ね、お話を聞く中で学んだことは、私の職業観に大きく影響しました。

四年次にSAを務めた「音楽は心の薬」～高齢者に音楽環境を



整えるラジオを活用して」では、高齢化や老人福祉施設の問題に向き合い、自らの課題と解決方法を模索する中で大きく成長する履修生の姿を見、学生が主体的に社会と関わることの大切さを学びました。そして、地域のネットワークづくりのためには、大人だけでなく、子どもが地域に出て主体的に地域の課題を解決するという視点が大切であり、私もいつかプロジェクト科目のような教育実践をしたいと思いました。

私は、四月から特別支援学校で働きますが、大学を卒業する時はまだ進路が決まっていなかった。卒業後、特別支援教育支援員をする中で、いろいろな人との出会いがあり、それらが今回の進路選択へとつながりました。人との出会いやつながりを自分の力にし、道を拓いていく。これは、私がプロジェクト科目で学んだことです。そして、卒業後、今までで一番生き生きとしている自分がいるのは、問題の解決に向けて、チームで課題と解決方法を考え、行動する楽しさを学生時代に知ることができたからです。

みなさんも、ここでの学びを大切に、自分の選んだ道を力強く進んでください。私も頑張ります。



## 【開催報告】 PBL教育フォーラム2014 2014年11月8日(土)

今出川校地良心館において、PBL推進支援センター主催・株式会社SIGEL共催PBL教育フォーラム2014「アクティブ・ラーニングにおける学習支援について考えるー学習支援者としての学生の役割と、その可能性ー」を開催しました。4回目となる今回は、PBLを含む、様々な授業形態のアクティブ・ラーニングに取り組む聖路加国際大学、京都造形芸術大学、関西大学、同志社大学の関係者に登壇いただき、TA/SA/LAを学習支援者として位置づけた時に、彼らの役割や可能性について意見交換を行いました。

第1部では、各大学教職員からアクティブ・ラーニングの取り組みと学習支援者の役割についての紹介、および、各大学のTA/SA/LAから学習支援の具体的な事例と学習支援者として学んだことについて報告がなされました。第2部では、「学習支援者としての学生の役割と、その可能性」をテーマに、山田和人センター長のコーディネートのもと、第1部で発表した各大学のTA/SA/LA4人によるパネルディスカッションが行われました。各大学独自の授業形態や学習支援のスタイルの相違を認識しながら、意見交換を行う中で、学生の取り組みに対するモチベーション維持や、学生が安心して議論できる環境づくりなど、学習支援者として共通する役割と、その必要性が見えてきました。さらに学習支援者が「評価者」の立場でプログラムを俯瞰的に見つめ、教員と共に学生の学びをコーディネートしていく教育プログラムの可能性を見出すことができました。当日は全国から大学関係者を中心に約150人の参加があり、質疑応答も活発に行われました。詳しい開催内容はPBL推進支援センターホームページをご覧ください。



### 山田センター長のつぶやき



同志社大学PBL推進支援センターの  
山田和人センター長によるコーナーです。

アクティブ・ラーニングでは学習空間が重要だが、その必要要件はきわめてシンプルである。オシャレな椅子やテーブルは必要要件ではない。カラフルな北欧家具もお金があれば設置すればいい。大規模教室をコミュニケーションが図れるように新設する必要もない。何が必要なのかを見極めるのが教育的観点!

～山田和人センター長 Twitterより抜粋～

## PBL推進支援センター2015年度事業予定

2015年度、PBL推進支援センターでは、教育方法としての質的な向上を目指して、以下の事業の開催を予定しています。

- |              |                |
|--------------|----------------|
| ■2015年6・7・8月 | 第1回PBL推進協議会    |
|              | 第2回PBL推進協議会    |
| ■2015年 11月   | PBL教育フォーラム2015 |
| ■2016年 2月    | 2015年度シンポジウム   |

今後、日程等に変更が生じることがあります。詳細につきましては、PBL推進支援センター ホームページにて、順次ご案内いたします。